

Beppo and The Octave Stanza (3)

—by G. G. Byron

楠 本 哲 夫

Byron は ^{激情} Passion と ^力 power の詩人である。Childe Harold 以後 次々と失継早やに出した Manfred に至る作品の中で詩想の泉は^{こんこん}滾々と尽きることなく湧き出た。

Byron はつねに＜黒い喪服をまとった 憂愁な人物＞として つねに登場してくる。

それが 自他共に認めた Byronic image であり バイロンの トレードマーク となった。

Byron は いつの頃から このマンネリズム化した自分の詩風となったトレードマークを打破せんと腐心するようになった。

Byron は 1817, 10, 12 John Murray に宛てた手紙の中で はじめて《Beppo》のことに ついて ふれている。

そのとき Childe Harold < Canto iv >をかきあげていた。

“Mr. Whistlecraft —— Frere だと思う —— のすばらしい詩風で 彼の詩風をまねて ユーモラスな 84連からなる ^{アクティブ} Oclave stanzas — 出版時は 99連 — を書いたが これは 僕の興味を惹いたヴェニス^{スタンザ}の逸話に詩題を得たものである。”

《Prospectus and Specimen of an Intended National Work》の中で John
Hookham Frere の—^{プルチ}Pulci の ^{アタヴァ リーマ}ottava rima 及び ^{英雄擬似体}mock-heroic の—改作詩風
に Byron が 幸運にも めぐり合ったことが たしかに Byron に 詩型
への考え 及び 滑稽な口語体詩風への考を与えたことは確かである。だが
^{素 材}<material>と^{詩的靈感}<estro>—— Byron は心理的に駆り立てる衝動をそうよぶ
——が、長い間 Byron の心の中に 芽生え 膨らみつつあったことは 確か
である。

詩風と詩的ムードを変えることへの機が今 Byron に熟しつつあった

1816年11月（28才）^{ヴェニス}Venice に到着して以来 Byron の昂ぶった 高揚され
た気力 精神は 反動をすでに経験していた。

そして夏の季節、バイロンの心に重くのしかかっていた陰気と絶望は——
それは Annabella との separation と exile によるものだったが——除々に消
えてゆき 少くともより明るい より活発な感情にとって代り、それは 彼の
書翰の中に横溢して ウィット として 吐き出された。そして 時に詩化さ
れた警句 気の利いた洒落へと炸裂していった。かなりの力作として《a new
third act of Manfred》は書きあげられ 又 Byron 追放後の流浪の旅が
a Roman voyage として 《a fourth canto of Childe Harold》として
その心境が蒸溜され 澄まされつつ 書き上げられていった。

ここで しかしながら——

Byron はこの一連の ムード 心境に倦いてきた。 Byron にとって この
ムードは 詩についての最も深い Byron の確信を満足させるものではない。
又 今の心境に一致するものではなかった と信じていい証左はある。

1817年（29才）の間 Murray と Moore に宛てた手紙は 大衆の目に 既に Byron の トレード、マーク となってしまった 自分の詩風に かなりの不満を洩らしている。

3月9日 Murray 宛に手紙をかいた。

“僕が君に送った作品 ≪ Manfred ≫ は一瞥して わかるだろうが 舞台（上演）用に試み考えたものではない。さらに公にすることすら、どうかとも憚られる。あまりにもしみついた 僕の詩風が ふんぶんと 臭っているからね。

僕は たしかに ほんとうに うんざりするほど いやな マンネリズムの詩風に情してしまった。”

そして——

3月25日には ≪ Beppo ≫ の詩題をつけることに関しては、果して妥当であるか どうかを 誰か識者に相談した方がいいよ とのべた後で こう 付記している——

“戻にも角にも ≪ Beppo ≫ の作品によって 僕には 快活に詩を書くことができるんだ、そして 単調とマンネリズム＜独創性を欠く同型に情した詩風＞を はねつけることができるんだ ということを 世間に示すつもりだ。”

そして みずからの危惧 不安のルーツを明らかにして その心中を洩らしきっぱりと言いつつ切った。

“自分も含め 現代の詩人達は 誤った革新的詩体系にはまろうとしている。しかも Pope とは全く、話しにもならぬ程 かけ離れた距離^{へだたり}におかれている”と。

《Beppo》を書きあげた わずか1カ月前にかかれた書翰の中で“《Childe Harold の第四巻》は最上の出来栄である”と Byron は述べているが さらにつけ加えて自分は これで 終結することを考えた、つまり＜そういう気分での自分の詩作は 書きつくして もう種切れになってしまった＞ことを述べている。

1817, 3月(29才)には 既に Moor には 不満をのべて 書き送っていた。

“僕の今 念頭を離れぬことは 読者大衆の脳裏の中に散在する僕という多くの黒点をどうしても 振り払うことができない という想いである”

そして Moore をせきたてる如く

“Jeffrey は——彼が 僕をそうだと誤解しているようだが—— その、厭世的にして 憂愁にみちた紳士 ではないか 確めてくれ”と書き送っている。

それ故《Childe Harold, Canto IV》を書きあげた頃までには Byron は 彼の世界観の全貌——局面的でなく——を より明らかに より誠実に反映することになるだろうような別の詩的態度 別の詩風を 用意していた。

それを《Beppo》の中で 全面的には 見出し得なかった、というのは その詩題となった エピソード そのものが あまりにもささやかなものでしたので そして又情緒的全般が あまりにも限られていたので彼の力量を充分に発揮して 全力投球が出来なかったから。

だが、しかし《Byron》の作品によって 彼の特異の天才に十分な吐け口

を与えることになった〈洪水の門〉が Byron のために 開門され 表現の自由への道が開かれることになったのである。

Byron が興味を覚え 《Beppo》 の物語の根づけとなった、そして これによって Byron は ^{ヴェニス}Venice の生活とモラルについて いろいろとコメントを展開してゆくのだが——その源となった種である逸話は——

1817, 8, 29日の 夕刻 ^{ヴェニス}Venice 郊外の ^{ラ ミラ}La Mira の Byron の別荘で Byron と彼の友人 Hobhuse に向って語られたのである。

そのとき この別荘には 〈^{かもしか}羚羊の如く美しく〉〈黒い大きな東洋的明眸〉の ^{マリアンナ}Marianna ^{セガティ}Segoti が Byron の愛人として 同棲中であった——その彼女の諸の性格については《Beppo》の物語の中で 具現化され もりこまれている。

そしてこの物語りが この ^{マリアンナ}Marianna の夫——Hobhouse に云わせると彼は 週末には よく La Mira で 過し 別の女性を口説いていたのだが——の口から告げられたことは 全く《Beppo》の精神に皮肉にも ぴったりとふさわしいものであった。

これは—— Hobhouse が 彼の日記に記録したように——逸話である。
即ち

“Venice の Regina di Ungheria 〈原文のまま〉に或るトルコ人が到着してそこで 投宿した。そしてその宿の女将——数年前に航海に出た良人は ^{おつと}消息不明となり子供達と暮していて、——は 40才の、丸ぼっちゃい、魅力的女性であるが トルコ人は 彼女と話したいことがあると申し出た。

その女将は 下ごしらえの所用をすませ そのトルコ人のところへ おもむいた。

彼はすぐに ドアを閉め 彼女に向って 彼女の家のこと、亡くなった夫のことについてきき質した。

彼女は彼女の亡くしたものに付き応えた。するとそのとき 彼は <亡くなった良人には 何か特徴はなかったか>ときいたので、彼女は答えた。<良人には肩に傷跡があった>と。

そのトルコ人は 自分の服を肩からずり下ろしながら “こんな傷跡だったか？” ときいた。そして “^{わし}儂がお前の^{おつと}良人だ” と告げる。

“わしは トルコに 行っていた。わしは 莫大な財産をきずいた そして今 お前に 三つの提案をする。

——お前の愛人の許を去って わしについてくるか

お前の愛人の許にとゞまるか

扶助料をもらって 一人で生活す か——”

ホップハウスは さらに言葉を加えた。<この婦人は まだ返答をしていない。だが M^e Zagati (原文のまま) は言った>

“私なら きっと 愛人の許を去って 夫の許へ帰ることはしないだろう” と言って Byron を ふりむきながら “これは 私にとっても とても大変なことだッネ”

Byron は イタリアの生活形態のある局面を詩の形態でうたいたいと切実に望んでいて英国の友人達に手紙で いろいろと イタリアの生活を書き送った。

その思いが バイロンの胸に炎えていて 点火栓となったのが この逸話であつたことは 疑う余地のないところである。

Byron が Frere とめぐり合わせた という幸福な事情が Byron の 新しい詩型を決定づけた。

その詩の用いた^{アタヴァ リーマ}ottava rima の＜落ち着いた口語体の気楽さ＞が Byron の心を惹いたのである。

というのは、その詩型が Wordsworth に倣ってさえ なお、あの英詩のもつ 月並みな 慣習的 重くくるしい ムードにとってまことに健康的解毒剤である如く Byron には 強く心をうったのである。

Byron は その、イタリアの英雄擬似体作家達の中での Frere の独創的源泉となった詩については あまり 精通していなかった、 もっとも Byron は Ottava rima でかかれた Castis Novella Galanli, Baccaccian tales, そして又 W. S. Rose によって匿名で翻訳された the Animati Galanti は 既にこれを読んで 絶讃していたが。—— W. S. Rose は Byron が ≪ Beppo ≫ を書き始めたころ Byron を訪問した。

しかし＜この形式ばった英語と 英語の外観を飾る感情の双方から、その気を抜いた deflation 詩型へと創意工夫することの可能性＞が、Frere の口語体のことばへの弁護を読んだとき、 Byron の心に ひらめいたのである。

Preserve with care your noble parts of speech

And take it as a maxim to endeavour

To talk as your good mother used to teach,
And then these lines of mine may last for ever;
And don't confound the language of the nation
With long-tailed words in *osity* and *ation*.⁸

きみの言葉の気高い機能を注意して温存せよ
母親が教えてくれたように話すよう努めることを
救いのみちと 心得よ
かくしてこれらの詩行は 永遠に続くだろう
この国の言葉を *osity* と *ation* の形で
長く尾を曳く言葉と混同してはならぬ

かくして Byron は幸運にも Pope の二行連句から転換した。——実はこれまで いつも Byron は これに頼って 人生への風刺と 馬鹿馬鹿しさの感情をのべてきたのだが——《Childe Harold》の詩風からの制約のみならず Byron が 偉大な師 Pope の足跡を意識的に踏襲しようとしたとき それがしばしば当然だと考えた あの技功的声からも一気呵成に Byron は 解放されたのである。

これは Byron が みずからの絶えず揺れ動く個性の正直な気まぐれと みずからの快活な精神の両方を表現するために必要とした〈解放〉だったのである。

とても 順応性をもつ この Ottava rima 詩型は
交互韻によって構成され
末尾の連句によって強められる
純粹の感情を表現するため
あるいは

滑稽韻によって チクリと刺され
道化けた気泡を吹き消すために

用いられることが可能であろう。

手紙文の中で そうするように リラックスして しかも 誠実に、揶揄しつつ 機知に富む ことができるような あるメディアを Byron は 発見していたのである。

それによれば 詩興到れば 詩作し そして 弁解なしに散文へと引返すことができた。

そして いかなる詩も 半ば以上優れたものはないと信じたから Degasus——ギリシャ神話。詩神 Muses の乗馬——の急襲、つまり、詩想感興の卒然と到ることに心を労しなかった。そして批評家たちには みずからの詩風の労せざる気楽さを 勝手に批評せしめて平然と甘んじていた。

LII.

But I am but a nameless sort of person,
 (A broken Dandy lately on my travels)
 And take for rhyme, to hook my rambling verse on,
 The first that Walker's Lexicon unravels,
 And when I can't find that, I put a worse on,
 Not caring as I ought for critics' cavils;
 I've half a mind to tumble down to prose,
 But verse is more in fashion—so here goes!

だが僕は ただの 無名の詩人

<最近 旅に出た 失意の酒落男>
脚韻の入門として ウォーカーの辞書から
学びつつ 漂泊の詩 うまくかきたい
それができねば 儂の悪詩は
当然のことだが 批評家の餌食さ
儂には半ば気持も動く 散文に駈けおりたいと
だが今は詩が流行じや—だから それ ゆけ！

< st 52 >

<詩題 乃至 詩風語調の統一制の欠如> <脱線> <一般に容認された
態度や感情 の皮肉な抜きとり> <非英雄的 乃至 擬似英雄的人物描写>
<英雄詩体二行連句の強調のため用いた警句的ウィット> <人生の解釈に
ついての写実主義>——これら すべてが Byron 詩に Byron の最も痛快な
文学、ことばづかい、を和らげる特性を賦与したのである。

この詩風が Byron を惹きつけたのは 明かに 素材 ^{素 材} と 主題 ^{主 題} に関し
て—— この詩風が柔軟に伸縮自在に対処できることにあった。

あらゆる種類の制約や形式主義にいらいらしていた Byron は 意のままに
脱線し 物語のすじの展界をぐずつかせるのに 無限の快適さを覚えた。

しかし 終極的に二つのテーマが抬頭、出現する。むろん Byron の空想を
捉えたすべてのものへの印象及び評言の渦巻をも排除することなく——。

一は物語の <モラル>である。愛と結婚の問題において イタリア人の寛
容である。

今一つは イタリア人とイギリス人との間の 態度 振舞いの比較対照であ
る—— もっとも英国的なものへの風刺は単一のテーマをはるかに超えるもの

であるが、

しかし——もっと大きな関心は Byron がこの海港の街で暮した数ヶ月の間
見聞した ^{ヴェニス}Venice の生活とモラルを写し出す野外劇であった。

Byron は イタリアの風土には とても 気に入る 満足したが 感傷的に
無批判にのめり込むことはなかった。

≪Beppo≫の詩の開口一番 ^{謝肉祭}Carnival のことに触れているが 人馴っこいもの
として、だが “farewell to flesh” では 次の如く ちょっぴり皮肉を効か
している。

I.

‘Tis known, at least it should be, that throughout
All countries of the Catholic persuasion,
Some weeks before Shrove Tuesday comes about,
The People take their fill of recreation,
And buy repentance, ere they grow devout,
However high their rank, or low their station,
With fiddling, feasting, dancing, drinking, masquing,
And other things which may be had for asking.

| | |
|-------------|--------------------------------------|
| 少くとも当然のことだが | 周知のこととして |
| カトリック教派の | あらゆる国では |
| ざんげ節の | 火曜日の数週間前が来ると |
| ひとびとは十分に | 休養をとり |
| 信心深くなる前に | ^{ざんげ} 懺悔 ^{あがな} を贖う |
| 地位高き者も | 身分賤しき者も |

ふらつき浮かれ踊り飲み 假面をつけて
ただて手に入る 其他の所業も

< st 1 >

VII.

And thus they bid farewell to carnal dishes,
And solid meats, and highly spiced ragouts,
To live for forty days on ill-dressed fishes,
Because they have no sauces to their stews;
A thing which causes many “poohs” and “pishes,”
And several oaths (which would not suit the Muse),
From travellers accustomed from a boy
To eat their salmon, at the least, with soy;

かくて肉欲と美食と 縁絶ち
美味い肉とも 胡^き淑の効いたラグーとも
四旬は暮らす 魚料理も素食で
シチューにソースはかけられぬからネ
不平不満の たらたらを
＜詩神^{ミューズ} 好まぬ＞ あくたれを
旅人から きく せめて醤油を紅^{サーモン}鮭にと
子供のときから 食べ慣れてきた ゆえ

次に Byron は ^{ヴェニス}Venice 女の美しい顔と黒い眸を讃えて詩う。

ここで Byron は この詩の他所でやる如く 連想的脱線へと転ずる。

バルコニーへよりかかるとき 女は ^{ジョルジオーネ}Giorgione の絵からぬけ出たようにみえる。そして それが Byron が ^{マンフリニ 宮殿}< Manfrini Palace > の中で讃えた肖像画の描写へと導いてゆく。

XII.

Whose tints are Truth and Beauty at their best;

And when you to Manfrini's palace go,

That picture (howsoever fine the rest)

Is loveliest to my mind of all the show;

It may perhaps be also to *your* zest,

And that's the cause I rhyme upon it so:

'Tis but a portrait of his Son, and Wife,

And self; but *such* a Woman! Love in Life! ¹

淡き色合その絵もち 真なる美なる最高に
 マンフリニ Manfrini 宮殿に 出向くとき
 儂^{わし}にはその絵が最高に美しと思えるどれよりも
 いかに すべてが 見事な絵でも
 あなたの好みにも 適^あうかも きっと
 だからその絵を そう詩^よんだ
 実^みは息子、妻、自^{みづか}らを 描いたポートレート
 すばらしい女の 生命の恋の

XIII.

Love in full and length, not love ideal,

No, nor ideal beauty, that fine name,

But something better still, so very real,

That the sweet Model must have been the same;

A thing that you would purchase, beg, of steal,

Wer't not impossible, besides a shame:

The face recalls some face, as 'twere with pain,

You once have seen, but ne'er will see again;

溢れ息きずく永遠の愛 観念的愛でなく
名にふさわしい 理想美でもない
それよりまさる とても真実の
美しきモデルは きっと同じだった
^{あがな}贖えるもの乞うてよいもの 盗めるもの
不可能でなくはないなら 恥をもおまけに
その顔はある顔をよび戻す 謂はば苦痛に充ちた
君がかつて見た だが二度と見ることはないあの顔

終結する二行連句で—— ^{おどけ}道化した連句で結ばす一気に真剣になる。

そして Byron は 全面的に失われた 純真無垢な あの《Childe Harold》
の ムードへとソーッと引返してゆく。

XIV.

One of those forms which flit by us, when we
Are young, and fix our eyes on every face;
And, oh! the Loveliness at times we see
In momentary gliding, the soft grace,
The Youth, the Bloom, the Beauty which agree,
In many a nameless being we retrace,
Whose course and home we knew not, nor shall know,
Like the lost Pleiad seen no more below.

若き日のその顔に 目を釘づけにする

もろもろの形の ひとつ
 あゝ折節に見る 美しきもの
 瞬時の流れの中で あの柔しい優雅
 若さ 満開 美 それは溶け合う
 回想する名もなき 多くの存在の中で
 その道行と住み家は 知らなかったし
 わかるまい下界では もう見られぬプライアド¹の如く

<註> ¹〔ギ神話〕Atlas と Pleione との七人娘：Orion に追いかけられ逃げまどった娘たちをあわれみ、Zeus は七つの星に化したという。《天文》すばる

だが すばやく擲揄のムードへと引返してゆく。

XVII.

Shakespeare described the sex in Desdemona

As very fair, but yet suspect in fame,
 And to this day from Venice to Verona
 Such matters may be probably the same,
 Except that since those times was never known a
 Husband whom mere suspicion could inflame
 To suffocate a wife no more than twenty,
 Because she had a “Cavalier Servente.”

XVIII.

Their jealousy (if they are ever jealous)

Is of a fair complexion altogether,
 Not like that sooty devil of Othello's
 Which smothers women in a bed of feather,
 But worthier of these much more jolly fellows,

When weary of the matrimonial tether
His head for such a wife no mortal bothers,
But takes at once another, or *another's*.

デズディモウナのセックスは とても美しいと
シェクスピアは描くが 彼女の風評^{うわさ}は疑う
ヴェニスからヴェローナまで 今日の日まで
そのような事情は 変らない
たゞし、その頃から 嫉妬^{あかし}にかられ
妻をしめ殺した夫は せいぜい20人
それ以上は 聞いてない
なぜなら 妻には ^{キャバリエール ナイト}＜随身の騎士＞がいたから

< st 17 >

夫の嫉妬は <嫉妬があれば>
なべて美しい艶やかさの ^{あかし}証 なのじゃ
オセロのドス黒い悪魔の魂^{たましい}——羽毛のベッドで
女をしめ殺した—— とは異質のものじゃ
結婚生活^{しがらみ}の柵に 倦いて
そんな女へ ^{わずら}煩うことなく
つぎつぎへと 思いは 移る

< st 18 >

Byron は 身近に その手本が用意されていた。というのは、マリアンナの
夫、セガティは Byron の歓待を友好的に うけ入れながら 他の女性を
いつも熱心に 口説いていた。

かくして テーマは 一見きまぐれな わきぜりふで 予示された。 だが

この詩の肝心な部分は その脱線にあった。そして Byron は この詩を30節以上も ひきのばしている。

次にとても 好都合な割当として ゴンドラを描くのが ふさわしく思われた。

XIX.

Didst ever see a Gondola? For fear
 You should not, I'll describe it you exactly:
 'Tis long covered boat that's common here,
 Carved at the prow, built lightly, but compactly,
 Rowed by two rowers, each called "Gondolier,"
 It glides along the water looking blackly,
 Just like a coffin clapt in a canoe,
 Where none can make out what you say or do.

ゴンドラを見たことがあるのかネ？ 見てないかも。
 ならばちゃんと 説明しよう
 それは長い屋形舟で ヴェニスでは ふつう
 舟首^{へさき}に彫刻 軽やかな造り^{つく} だが引締って
 漕ぎ手は二人 ゴンドリアと呼ばれる。
 黒々とした姿で 水面を滑りゆく
 カヌーの中に閉じこめられた 棺^{ひつぎ}のよう
 そこでは 言動は 誰にもわからぬ

XX.

And up and down the long canals they go,
 And under the Rialto ¹ shoot along,
 By night and day, all paces, swift or slow,
 And round the theatres, a sable throng,
 They wait in their dusk livery of woe, —
 But not to them do woeful things belong,
 For sometimes they contain a deal of fun,
 Like mourning coaches when the funeral's done.

ゴンドラは 往^いったり 来^きたり 長い運河を
 リアルトウの橋の下は さっと 過ぎる
 舟足は のろく 速く 昼でも 夜でも
 劇場を囲んで 黒黒と屯^{たむろ}して
 かれらは 待つ 揃^{そろ}いの黒い喪服着て
 だが哀しみは かれらのものでない
 なぜなら種々^{くさくさ}の楽しみが 折ふし、あるゆえ
 葬いの終りし後の 霊柩^{れいきゆうしや}車のごと

< st 20 >

それから——まぎれもなく 実生活から描かれたものとして Byron の新
 しい愛人 Marianna と、^{マリアンナ} 謝肉祭^{カーニバル}の直前、忽然と現れた さらに新しい愛人 パ
 ン屋の妻 ^{マルガリータ} Marugarita との、混合、合成的ヒロイン、^{ローラ} Laura を Byron は
 紹介する。

この、Byron のヒロインの選択は 一見そう思えるほど 気まぐれではない
 と思える。

XXI.

But to my story.—‘Twas some years ago,

It may be thirty, forty, more or less,

The Carnival was at its height, and so

Were all kinds of buffoonery and dress;

A certain lady went to see the show,

Her real name I konw not, nor can guess,

And so we'll call her Laura, if you please,

Because it slips into my verse with ease.

だがわが物語りは——数年前のこと

30年いや40年前 まあ そのくらい

謝肉祭が最盛期の頃だった だから

あらゆる道^{パフォーネリー}化と 衣裳があった。

ある婦人が ショーを観にいった

本名は^{わし}儂は知らぬ 知るよしもない

だから^{ローラ} Laura と呼んどこう—— まあネ

なぜならその名がさっと 儂の詩に飛びこんだから

< st 21 >

Byron によって しばしば口にされた プラトンの 理想への風刺的輕蔑からかながえて Petrarch——1304-74, イタリアの詩人, ペトラーク, 文芸復興の主導者, ——の感傷的に, ヴェイルに包まれた, 皮肉にも, うらはらな 愛人の名を Byron が 選んだと考えるのは こじつけだとも云えない。

というのは Byron のヒロインは ^{ソネット} sonnet よりも むしろ 色目を注ぎこむだろうヒロインだから

XXIII.

Laura was blooming still, had made the best
 Of Time, and Time returned the compliment,
 And treated her genteelly, so that, dressed,
 She looked extremely well where'er she went;
 A pretty woman is a welcome guest,
 And Laura's brow a frown had rarely bent;
 Indeed, she shone all smiles, and seemed to flatter
 Mankind with her black eyes for looking at her.

| | |
|------------------------|------------------------|
| ローラは花の盛り | 世を最高に謳歌し |
| 世間も彼女に | 媚びを かえして |
| 優しく ^{もて} 遇なす | だから彼女は着飾り |
| どこへ出かけても | 最高に ^{しあわせ} 幸福 |
| 美しい女は | 歓迎される客 |
| ローラが 渋面を | つくることなし。 |
| 満面 ^{たえ} 微笑を湛え | 愛想をふりまき応える |
| 黒い ^{ひとみ} 明眸で | 色目をつかう男達へ |

< st 23 >

そして ^{ローラ} Laura の夫の名——それを、この詩の題名とした—— < 彼の
^{ジュゼッペ} 名 Guiseppe, 簡単に ^{ベッポ} Beppo と呼ぶが>—— のは、Beppo と呼ばれる
 Guiseppe の いたずらっぽい眼ゆえに選ばれたのは いかにも もっともで
 ある。そして Guiseppe < Beppo と呼ばれる> は 老 Benzon 伯爵夫人の、
 有名な、献身的 < ^{キヤバリエール・セルバンテ} 随 身 の 騎 士 > であり、実は、Byron はこの Benzon
 伯爵夫人の社交サロンで、後に、^{グイッチョリ} Guicciori 伯爵夫人と めぐり合ったのであ
 る。そして彼女の < ^{キヤバリエール・セルバンテ} 随 身 の 騎 士 > となる。

XXIV.

She was a married woman; 'tis convenient,
 Because in Christian countries 'tis a rule
 To view their little slips with eyes more lenient;
 Whereas if single ladies play the fool,
 (Unless within the period intervenient
 A well-timed wedding makes the scandal cool)
 I don't know how they every can get over it.
 Except they manage never to discover it.

ローラは 既婚女性 それは彼女には好都合
 キリスト教国では しきたりだから
 ちょっとの過失は 寛大に看のがす が
 一方、独身女性が へまをやると
 <調停停期間中 時期を失せず
 結婚して ^{スキャンダル}醜聞をおさめないとか>
 彼女らは ^{スキャンダル}その醜聞に 勝てないんだ
 露見せぬよう うまく切抜けければ別だが

< st 24 >

われわれは Beppo が航海へ出て 長い間蒸発した後で ^{ローラ}Loura の不倫の関
 係を、慈悲深いイタリア的寛容の心で許すと気持に従って その変節に対処す
 る心構はできていた。

XXIX.

And Laura waited long, and wept a little,
 And thought of wearing weeds, as well she might;
 She almost lost all appetite for victual,

And could not sleep with ease alone at night;
 She deemed the window-frames and shutters brittle
 Against a daring housebreaker or sprite,
 And so she thought it prudent to connect her
 With a vice-husband, *chiefly to protect her.*

| | |
|--|--|
| 久しく待ち侘びて | ローラは泣きぬれた |
| ^{あらくき} 雑草は茂 ^お うままで | よいと思った |
| 彼女は食物も | 受けつけず |
| 夜は独り寝を | まんじりともせず |
| 窓 ^{わく} 枠も 鎧戸も | がたがたとなり |
| 鉄面皮な家屋破壊者の前では | もろい |
| そこで考えた | 第二の夫をもつのが |
| 賢明だと | ^{もつぱ} 専ら ^{みずか} 自らを疵護の為 |

< st 29 >

Byron は ^{ローラ} Laure の<随身の騎士>伯爵を<音楽, ダンス, ヴァイオリン, フランス語, タスカニー語> に堪能な伊達男——として描いている。
 そして、彼は、また、<オペラの批評家, であり ^{くろうと} 玄人>であった。

伯爵の徳は<誠実>であることだった。彼は<良き 古き学校を愛し>
 人が冷やかになるとき ますます ^{かわ}不変^わらなかった。

これが < serventismo >—<奉仕行動>— の function <役割>についで
 の論議へと導入, 展界されてゆく

Byron は この時点までは この種の奉仕には 抵抗していた ——まだ
^{グイッチョリ} Guiccioli 伯爵夫人の魅力に屈していなかった。Byron が Guiccioli 伯爵の

＜^{キヤバリエール・セルバンテ}隨身の騎士＞となったのは 1819, 4月＜Byron 31才＞である。

それ故、たとえ 道徳的否認ではないとしても 少なくとも このような 既婚貴婦人への、男性の奉仕に対して＜英国人的侮蔑＞の考え方が より優位に立つものであることを声を大にして強調した。

Byron はみずから ^{グイッチョリ}Guicciori 伯爵夫人の＜^{キヤバリエール・セルバンテ}隨身の騎士＞の身分たることを 承諾し容認した後ですら この ^{制度}system に服したことで、実は いろいろと悩み、当惑を経験している。

そのことで 彼は 1819年10月3日、^{ホップハウス}Hobhouse に 手紙をかいている。

“僕は イタリアの生活に倦いてはいない。ここでは、一個の男子たるものが ^{チチズベオ}Cicisbeo — cavalier servente のスラング—となり、^{デュエット}duet ＜二重唱＞で 唄わねばならず ^{オペラ}Opera の ^{カナサール}con-nois-seur ＜目きき＞でなければならない。でなければ ここ イタリアでは 男は 役立たたずの半端者 ^{はんばもの}扱いされるんだよ。

僕は このような素養が多少 身についてきた。だがしかし ＜墮落＞したもんだ と 感じないわけにゆかないよ。

バイオリン弾きの追しよう者、御婦人の扇子持ちより もっとましな、なにかの職務であればよいが。

僕は女性が好きだ——たしかに——だが、この制度が ここイタリアで より発展すれば 僕の立場もトルコ人にならって、もっと不都合になりゆくように思える。ここイタリアでは ^{一夫多妻主義}polygamy が すべて 女性に有利に 一妻多夫制度となっている。”

だがしかし Byron が＜^{ベッポ}Beppo＞を書いたとき 彼は まだ＜この慣習＞に興味をいだき、むしろ 祖国 英国での秘密の、こそこそと行われる不義密

通や偽善の主義ほどには 悪徳ではないと 考えていた。

XXXIV.

Then he was faithful too, as well as amorous;
So that no sort of female could complain,
Although they're now and then a little clamorous,
He never put the pretty souls in pain;
His heart was one of those which most enamour us,
Wax to receive, and marble to retain:
He was a lover of the good old school,
Who still become more constant as they cool.

XXXV.

No wonder such accomplishments should turn
A female head, however sage and steady—
With scarce a hope that Beppo could return,
In law he was almost as good as dead, he
Nor sent, nor wrote, nor showed the least concern,
And she had waited several years already:
And really if a man won't let us know
That he's alive, he's *dead*—or should be so.

XXXVI.

Besides, within the Alps, to every woman,
(Although, God knows, it is a grievous sin,)
'Tis, I may say, permitted to have *two* men;
I can't tell who first brought the custom in,
But "Cavalier Serventes" are quite common

And no one notices or cares a pin;
 And we may call this (not to say the worst)
 A *second* marriage which corrupts the *first*.

XXXVII.

The word was formerly a “Cicisbeo,” ¹
 But *that* is now grown vulgar and indecent;
 The Spaniards call the person a “*Cortejo*,” ²
 For the same mode subsists in Spain, though recent;
 In short it reaches from the Po to Teio,
 And may perhaps at last be o’er the sea sent:
 But Heaven preserve Old England from such courses!
 Or what becomes of damage and divorces?

<註> ¹ [The origin of the word is obscure. According to the *Vocab. della Crusca*, “cicisbeo” is an inversion of “bel cece,” beautiful chick (pea). Pasqualino, cited by Diez, says it is derived from the French *chiche beau*.—*N. Eng. Dict.*, art. “Cicisbeo.”]

² Cortejo is pronounced *Cortejo*, with an aspirate, according to the Arabesque guttural. It means what there is as yet no precise name for in England, though the practice is as common as in any tramontane country whatever.

彼は誠実でもあり 好色でもあった
 だからどの女性も 不満を訴えなかった
 もっとも ときおり ちょっと騒ぎ立てたが
 彼は美しい女性を 苦しめたことはない
 彼の心情は我々を 夢中にさせ
 謂うなれば受けとるワックス、保ちおくマーヴル
 彼は 良き 古き 学校を愛し
 人が冷やかになるとき いっそう不変だった

あたりまえのことだが、その教養が変えたのだ
^{かしこ}賢く しっかり者の 女性の考を——
 ベッポーが帰る ^{のぞみ}希望も 消えて
 法的に 彼は 死んだも 同然
 いささかの関心も送らず 便りもしなかった
 それなのに 彼女は ^{さら}更に数年まち続けた
 現実 は 男が生存の 音信を絶つとき
 彼は死んでいるのだ—いや、当然 そうだ

< st 35 >

おまけにアルプス地方では 女性は誰でも
 <神のみが知る 哀しい罪だが>
 二人の男をもつことが許されるのだ
 誰がこの風習を ^{わか}もち込んだか解らぬが
 <^{キヤバリエール・セルバンテ}随身の騎士>は 至極 ふつう
 誰も気にとめぬ いささかも
 そして我々は、これを（最悪とは言わぬ迄も）
 最初の結婚を墮落させる 第二の結婚と呼ぶ

< st 36 >

この語は昔は ^{チチズベオ}< Cicisbeo >と言ったが
 今は俗化して 下品となった
 この者をスペイン人は^{コルテホ}< Cortejo >と呼ぶ
 そんなモードが極く最近スペインで取って替った
 要するにポー河からティオ地方までこの風習は及ぶ
 そして多分遂には海をこえてゆくだろう
 だが神は古き英国からはそのコースを守るだろう

さもなきや被害と離婚は どうなりゆくか？

< st 37 >

同時に Byron は イタリアの放縦と寛容と英国の道徳的厳格さとを比較する機会を掴んだことを歎んだ。

しかし Byron の既婚女性への讃美は イタリア女性へ限られたものではなかった。 既婚女性を讃えてうたう。

XXXVIII.

However, I still think, with all due deference

To the fair *single* part of the creation,

That married ladies should preserve the preference

In *tete a tete* or general conversation—

And this I say without peculiar reference

To England, France, or any other nation—

Because they know the world, and are at ease,

And being natural, naturally please.

だが^{わし}儼はなお思う あらゆる正当の尊敬をもって

人類という創造物のうち 独身女性よりも

既婚女性が 当然じゃが ^{まさ}優る

密談でも 会話一般でも

このことは 格別 英仏、其他の国で

とりたてて 言うのではないが——

なぜなら既婚女性は 世間を知り気楽に構え

自然体であるから 当然 気に入られる

< st 38 >

XXXIX.

‘Tis true, your budding Miss is very charming,
 But shy and awkward at first coming out,
 So much alarmed, that she is quite alarming,
 All Giggle, Blush—half Pertness, and half Pout;
 And glancing at *Mamma*, for fear there’s harm in
 What you, she, it, or they, may be about:
 The Nursery still lisps out in all they utter—
 Besides, they always smell of bread and butter.

花も蕾の 娘はきれい いかにチャームングだが
 咲き初めしとき ^{はじら}羞いて ぎこちなく
 おどおどして 用心深い
 クスクス笑いと赤面と、半ば生意気 膨れ^{つら}面
 ちらりと母親を見て 危害^{おそ}を怖る不安顔
 周囲のみなが していることで。
 口にするのは 育児部屋のカタコト
 おまけに いつも ^{ちちくさ}乳臭い

< st 39 >

それからちょっとふりかえって<随身の騎士>のことに 一言 ふれる

XL.

But “Cavalier Servente” is the phrase
 Used in politest circles to express
 This supernumerary slave, who stays
 Close to the lady as a part of dress,

Her word the only law which he obeys.

His is no sinecure, as you may guess;

Coach, servants, gondola, he goes to call,

And carries fan and tippet, gloves and shawl.

| | |
|--------------------------|-----------------|
| キヤバリエール・セルバンテ | |
| <随身の騎士>は | 上流社会の使用語 |
| 臨時の奴隷を | あらわ表現するための |
| レディのドレスの | 一部としてネ |
| 身近く いつも | 付き添う男 |
| 女主人の命令のみ | ことばきかねばならぬが唯一の掟 |
| 意外と多忙 | 閑職でない 彼の仕事 |
| コーチ馬車、召使、ゴンドラと凡ての手配は彼がする | |
| 扇、襟巻、手袋 肩掛を捧げもつのも 彼の役 | |

< st 40 >

それから まつしぐら 単刀直入に イタリアと英国の比較へと 切込む

XLI.

With all its sinful doings, I must say,

That Italy's a pleasant place to me,

Who love to see the Sun shine every day,

And vines (not nailed to walls) from tree to tree

Festooned, much like the back scene of a play,

Or melodrame, which people flock to see,

When the first act is ended by a dance

In vineyards copied from the south of France.

XLII.

I like on Autumn evenings to ride out,
 Without being forced to bid my groom be sure
 My cloak is round his middle strapped about,
 Because the skies are not the most secure;
 I know too that, if stopped upon my route,
 Where the green alleys windingly allure,
 Reeling with *grapes* red wagons choke the way,—
 In England 'twould be dung, dust, or a dray.

罪深き所業の数々 さりながら
 すみよきところ イタリアは 儂^{わし}には
 太陽の毎日 照りつけるを愛し
 葡萄^{ぶどう}蔓^{づる}が＜壁に釘づけでなく＞樹から樹へ
 花づなとなり 劇の メロドラマの背景そっくり
 それを人々は 群なして観る
 そのとき 第一幕は 南佛の葡萄畑を擬した
 葡萄園の中での踊りで閉じる

< st 41 >

儂^{わし}は 好きじゃ 秋^{ゆうべ}の夕の 遠出が
 馬丁に 確めるよう 命じなくてよい
 儂の外套が彼の腰に 巻いてあるかと
 なぜなら 空模様が 不安なら。
 もし途中で足止めになれば 儂^{わか}には解^{わか}っとるんじゃ
 どこで緑の小径^{こみち}の九十九折^{つづらおり}が魅惑的で
 赤馬車が 葡萄を積みふらつき道を塞ぐか—
 英国では それは 糞^{くそ}か芥^{あくだ}か荷馬車だが

< st 42 >

XLIII.

I also like to dine on becaficas,
 To see the Sun set, sure he'll rise to-morrow,
 Not through a misty morning twinkling weak as
 A drunken man's dead eye in maudlin sorrow,
 But with all Heaven t'himself; the day will break as
 Beauteous as cloudless, nor be forced to borrow
 That sort of farthing candlelight which glimmers
 Where reeking London's smoky cauldron simmers.

XLIV.

I love the language, that soft bastard Latin,
 Which melts like kisses from female mouth,
 And sounds as if it should be writ on satin,
 With syllables which breathe of the sweet South,
 And gentle liquids gliding all so pat in,
 That not a single accent seems uncouth,
 Like our harsh northern whistling, grunting guttural,
 Which we're obliged to hiss, and spit, and sputter all.

XLV.

I like the women too (forgive my folly!),
 From the rich peasant cheek of ruddy bronze,
 And large black eyes that flash on you a volley
 Of rays that say a thousand things at once,
 To the high Dama's brow, more melancholy,
 But clear, and with a wild and liquid glance,
 Heart on her lips, and soul within her eyes,

Soft as her clime, and sunny as her skies.

XLVI.

Eve of the land which still is Paradise!

Italian Beauty didst thou not inspire

Raphael, who died in thy embrace, and vies

With all we know of Heaven, or can desire,

In what he hath bequeathed us? —in what guise

Though flashing from the fervour of the Lyre,

Would *words* describe thy past and present glow,

While yet Canova can create below? ¹

<註> ¹ [“(In talking thus, the writer, more especially
Of women, would be understood to say,
He speaks as a Spectator, not officially,
And always, Reader, in a modest way;
Perhaps, too, in no very great degree shall he
Appear to have offended in this lay,
Since, as all know, without the Sex, our Sonnets
Would seem unfinished, like their untrimmed bonnets.)
“(Signed) PRINTER’S DEVIL.”]

儂はベカフィーカの 美味を愛す
いりつひ 日没を眺めるも好き きっと明朝も太陽は昇る
よいどれ うつつ 酔漢の空虚な目の如 感情的哀みを弱々しく
しばた 瞬く 霧濃き朝からでなく
満天を独占して 日輪は上る日は明ける
一点の雲なく美しく 明滅する一文臘燭の
あか 灯りを借りずともよい ロンドンでは悪臭を放つ
煙の大鍋が ぐつぐつ煮えているが

< st 43 >

<註> ベカフィーカはうぐいす科の鳴禽。いちじくを食べ、その鳥の肉は美味。

ラテンに似た柔^{やさ}しい言葉が 儂は好き
 女のキスに似て 溶けてゆくことば
 繻^{しゆす}子に書かれる 響きをつたえ
 甘い南国^{いぶき}の息吹 その音楽を運ぶ
 優しい流音は 滑るが如く
 ひとつの訛^{なま}りも 瀟洒に ぐだけ
 粗い北国の口笛の ブップッ ガラガラ
 シーシーと 唾^{つばき}吐き ベラベラ鳴ると異って

< st 44 >

女も好きじゃ <儂を 許せよ>
 豊かな農婦の 赤銅^{あかがね}色の頬
 大きな黒瞳^{くろめ}は 閃光を放ち
 百万言^{もくご}の思慕を 投げる
 貴婦人の高き額^{ひたい}は 愁い
 澄みいて激しく 凝視^{みつ}む眼差^{まなざし}
 唇^{くち}に情^{おもい}を 瞳^めには心を
 この風土^{つち}の如^{ごとやさ}しく 空の如^{あつたか} 滋い

< st 45 >

いまだ楽園^{ハラダイス}なる 郷^{くに}のイヴよ
 汝は汝の抱擁の中に 死んだラファエルに
 イタリアの美を 鼓吹しなかったか。
 そして競う我らと 神について知る、希^{のぞ}む、全てを。
 彼は我らに何を遺^{のこ}した？ いかなる外観で
 立琴の白熱からの閃きだとしても ことばは
 汝の過去と現在の もゆるものを描けるか？

カノーヴァ

Canova には地上にだが それを創造しうるだろう。

< st 46 >

<註>カノーヴァはイタリアの彫刻家 (1757-1822)

ふたたび 旋律はひき締まる そして ^{ラファエル}Raphael や ^{カノーヴァ}Conova により描かれた
イタリア美人の理想化を讃える。

XLVII.

“England! with all thy faults I love thee still,” ¹

I said at Calais, and have not forgot it;

I like to speak and lucubrate my fill;

I like the government (but that it not it);

I like the freedom of the press and quill;

I like the Habeas Corpus (when we’ve got it);

I like a Parliamentary debate,

Particularly when ’tis not too late;

<註> ¹ [*The Task*, by William Cowper, ii. 206. Compare *The Farewell*, line
27, by Charles Churchill—

“Be England what she will,

With all her faults, she is my Country still.”]

“英国よ 我汝を愛す 数多のきずのあるがまま”

カレーの波にかく呼びし言葉は今も胸にあり

話すこと、書くことが好き儂は 心ゆくまで

政府も好きじゃ <いや、それはどうでもよい>

出版と驚ベンの 自由を愛す

^{人身保護令}Habeas Corpus を愛す <獲得のあかつき>

議会の論戦を愛す ^{わし}儂は

とくに 手遅れに ならぬとき

< st 47 >

<註> “Be England what she will, ...

<英国の未来が、どうなりゆくとも、あまたのきずのあるがまま、それでも英国は、わが祖国>の、The Task (by W. Cowper), The Farewell (by Charles Churchill) と比較。

XLVIII.

I like the taxes, when they're not too many;
 I like a seacoal fire, when not too dear;
 I like a beef-steak, too, as well as any;
 Have no objection to a pot of beer;
 I like the weather, —when it is not rainy,
 That is, I like two months of every year.
 And so God save the Regent, Church, and King!
 Which means that I like all and every thing.

XLIX.

Our standing army, and disbanded seamen,
 Poor's rate, Reform, my own, the nation's debt,
 Our little riots, just to show we're free men.
 Our trifling bankruptcies in the Gazette,
 Our cloudy climate, and our chilly women,
 All these I can forgive, and those forget.
 And greatly venerate our recent glories,
 And wish they were not owing to the Tories.

L.

But to my tale of Laura, —for I find
 Digression is a sin, that by degrees
 Becomes exceeding tedious to my mind,

And, the refore, may thereader too displease—
 The gentle reader, who may wax unkind,
 And caring little for the Author's ease,
 Insist on knowing what he means—a hard
 And hapless situation for a Bard.

LI.

Oh! that I had the art of easy writing
 What should be easy reading! could I scale
 Parnassus, where the Muses sit inditing
 Those pretty poems never known to fail.
 How quickly would I print (the world delighting).
 A Grecian, Syrian,² or *Assyrian* tale;

| | |
|-----------|---------------|
| 祖税を愛す | 過重ならぬとき |
| 石炭の炎えるを愛す | 廉価なるとき |
| ビフテキを 愛す | 何よりも |
| 一本のビールも | 目がないほど |
| 天候も好きだ | ——雨期は別だが |
| つまり一年のうち | 二ヶ月を除けば |
| 神よ 祝福を | 摂政王に、教会に、国王に！ |
| つまり 愛す | 祖国のすべて |

< st 48 >

| | |
|-----------|------------|
| わが不動の軍隊よ | 船をおりた舟乗りよ |
| 貧民の割合改革法案 | わが借財と、国家の、 |
| ささやかな暴動は | 自由を示すゆえ |
| 官報に掲載される | ささやかな破産 |

曇り日の天候 冷い女
 これも あれも すべて忘れ
 我らの栄光を 大いに^{あが}崇め
 だがトーリ党に 借りはつくるまい

< st 49 >

それからナレーター（バイロン）は第50節で弁明する如く装うて うまく、
 物語を すすめて ゆく

しかしローラのお話には——儂にはわかるが
 儂の心も 除々に とても退屈になりゆき
 読者にも あまりにも不愉快だろうような
 脱線は 罪だと ね——
 寛大な読者も 薄情になりゆき
 作者の気やすさに 無関心となり
 彼の真意は 奈辺にと 知ることを 主張する
 詩人にとって、 それは 不運な立場

< st 50 >

しかし Byron は ふたたび 若き日のこと、愛のこと、^{カーニバル}謝肉祭のこと、
^{集会場}Ridotto のこと、そして 流行界のこと——それは 我々に、英国の
^{ダンディ} <dynasty of Dandies> な ^{王朝}を 想起させるが——に さまよいながら 移りゆ
 く前に 伯爵とローラが <新しい取決めをした> そして <非合法的な愛が
 許すかぎり 幸せだった> ということ 以上には話しをすすめていない。

気楽に読めるものを 気楽にかくこつが
 ああ儂に会得できさえしたら！ 儂によじ登れるか
 パルナッソス山へ そこで^{ミューズ}詩神は坐して詩をかく

美しき詩を 完璧に いつも
いかに即妙に映せるか <たのしい世界>
ギリシア シリア アッシリアの物語りを。
そしたら売るよ 西欧的感^{センチメンタル} 傷を混ぜてね、
最高に美しい東洋主義の、いくつかの見本を

< st 50 >

このことは 順次 ナポレオンの<悲運>への回顧、及び 人間の生命を支配する<幸運>、への回顧 反省をもたらす。

そして 更に 絶叫して 注意を喚起する。

LXIII.

To turn, —and to return; —the Devil take it!

This story slips for ever through my fingers,
Because, just as the stanza likes to make it,

It needs must be —and so it rather lingers;
This form of verse began, I can't well break it,

But must keep time and tune like public singers;
But if I once get through my present measure,
I'll take another when I'm next at leisure.

脱線し—また引返す—もう うんざりした!

この物語は いつも 指間より ずり落ちる

筋書きをこの連が望むよう そうあらねばならぬ

—だからこそ ぐつつきたいのだ

この詩型で始めたのじゃ 崩すわけにゆかぬ

だがプロ歌手のよう 調子は合わせねばならぬ

この韻律を 完成できたら

また うたうよ この韻律を 亦暇の時

< st 63 >

しかし、Byron は 自分の特技は 気楽な談話の中で自由に 自然に ——
たとえば 手紙の中で 甲の話題から 乙の話題へと 自然に そして 非弁
解的に 導きながら—— 脱線することにあると 感知していた。

Byron は 群衆の中をかきわけて ローラの後をつける。だが 立ち止って
は 興味をひくことには 何でも 批評を下す。

ローラはトルコ人が じっと自分を注視しているのを感じて イスラム教徒
の間での 女性への態度に関して ナレーターをけしかける。そして これ
が口火をきって 女性の教育の凡ての問題を 英国の教養ある婦人即ち ^{青踏}Blue
^{派婦人}stocking <知的女性>に関する鋭い風刺を混えて まくし立てる。

そして 次に文学的洒落者への 彼の軽蔑的言葉を声を大にして言う。

LXXV.

One hates an author that's *all author*—fellows

In foolscap uniforms turned up with ink,

So very anxious, clever, fine, and jealous,

One don't know what to say to them, or think,

Unless to puff them with a pair of bellows;

Of Coxcombry's worst coxcombs e'en the pink

Are preferable to these shreds of paper,

These unquenched snuffings of the midnight taper.

作家^{ずら}面した作家は きらわれる——

フルスキャップの制服で、奴らはインクさげ現れる

渴望，りこう面，御立派，妬^{ねた}み顔
彼らにどう言うか 彼らをどう考えるか
さっぱり わからぬ ふいごで 吹くより
気取り屋の中で 最上の洒落男でも
この半端紙よりは ましだ
深夜の燈心の くすぶる 臭^{におい}気よりは

< st 75 >

トルコ女性が諸の権利を剝奪されていることへの数々の皮肉な評言をつづけながらもつねに英国に焦点を合わせ 彼の数学的妻アナベラに向けての、いたずらっぽい 嘲笑の言葉で終っている。

LXXXVIII.

No Chemistry for them unfolds her gases,
No Metaphysics are let loose in lectures,
No Circulating Library amasses
Religious novels, moral tales, and strictures
Upon the living manners, as they pass us;
No Exhibition glares with annual pictures;
They stare not on the stars from out their attics,
Nor deal (thank God for that!) in Mathematics.

化学は女達に気体論を 明かさず
哲学も講義を ゆるめはしない
巡回図書館も 集めはしない
宗教図書 訓話 そして生き態への非難を
我らのそばを 行き過ぎるとき
展示会も毎年の写真に 女をどぎつく映さず

彼女らは星群を眺めず 屋根裏部屋から
 数学の扱いは知らぬ <ありがたいことに>

< st 78 >

それから卒直に自白する

LXXIX.

Why I thank God for that is no great matter,
 I have my reasons, you no doubt suppose,
 And as, perhaps, they would not highly flatter,
 I'll keep them for my life (to come) in prose;
 I fear I have a little turn for Satire,
 And yet methinks the older that one grows
 Inclines us more to laugh than scold, though Laughter
 Leaves us so doubly serious shortly after.

神にそのことを感謝する 儂なりの理由は
 どうでもよいが 君らの想像が正しいようだ
 それは はしゃぐ如きものではない故
 散文にして これからの生涯にとっておこう
 儂には風刺傾向があるようじゃ どうも
 だが老いるほどに 叱るより嘲笑^{わら}いたくなる
 と儂は思うんじゃ もっとも笑いは
 その直後では 我らを二倍 真剣にさせるが

< st 79 >

最終的に この物語へと引返すとき Byron は 器用に しかも あまり脱線せず ごく自然に 結びへともたらず。

ローラと伯爵は ローラの夫をコーヒーに招く。そしてローラは夫の失態をとがめ 口うるさく まくしたて 夫を尻の下にしく。だが 夫の要求を
おだ 穏やかに受けとめる、一方 彼と伯爵は 仲良し友達としてとどまる。

《Beppo》の中で Byron は 遂に 自らに適した（性分にあった）^{メディア} media を
発見し得たことを 自覚する、つまり

それが＜Byron の 精神と情緒のあらゆる局面の表現への自由を与えてく
れるものである＞ という 自覚であった。

以前から Byron には＜ある予感＞があった、—— それは

＜もし 大衆が受けとめてくれるなら 自分の創作活動を無限に拡大できるの
だ＞ という 予感があった——

それは Byron にとってこの詩型が
＜人間のもろさ 弱さの 軽い観察のみならず、人生の真剣な観察を表現すべ
英雄詩体二行連句
く heroic couplet よりも より満足的形態である＞ことを 完全には 自覚し
認めてはいなかったけれども。

^{不 明}
その blindness の度合は 彼は その詩作経歴の最後迄 Pope の詩風になら
い ＜自分の詩を道德化＞ しようと努め続けた 点であった。

その後——

《Dan Juan》の数編をかきあげて、そして

詩というものは

- ① 道化と滑稽 ^{つげい} な wit ^{ウィット} のみならず
 ② 近代社会への真面目な風刺

の流露であると 考えた後で

これが——この詩風によれば 彼は、彼の文学、そして恐らく、彼の詩道への 最も独創的貢献をなし得る—— 彼の才能に最も適した詩風である という本能的感情を抱くに至った。

しかし それでもやはり まだ Byron の

(1) Pope への 批判的恭順の 気持

(2) Pope を＜かがみ＞とする 気持

を 捨てさることは できなかった。

Byron は《Beppo》を、—— Murray や Moore に宛てた手紙の中での 警句や ^{ウィット} 機知 の如き、ショックを与え たのしませるために意図された——
 ＜冗談、^{いたづら} 悪戯好きの風刺詩＞ 以外の何ものでもないと思なした。

そして それは 読者大衆の心の中で、 Byron の トレード マーク となってしまう＜重々しい 憂愁にみちた 喪服色＞を 脱ぎすて ほんと一息き、＜息抜き＞することであった。

《Beppo》は一見、気楽に、口語体で 気儘な筆致でかかれたけれども Byron は 各詩行の言葉ずかいは 極度に 慎重な注意を払った、そして そのことは 初稿の修正に明らかに うかがわれる。

Byron は 最終二行連句で 各行に展界された思想に 力強い風刺的傾向 あるいは 興味ある＜ねじり＞を与えるべく意図して 最も効き目ある変化を

与えている。

このことは 特に Truman Guy Steffan によって *Philological Quarterly*, xxxii (1953) 154-171 に 指摘されている。

< informal style >—くだけた 詩風— は<技巧をかくす> 一つの技巧の結果だった。

この詩の中で 純粹に自然に思えるものがその ^{音調} tone 及び ^{言外の意味} connotation 及び ^{句切り法} phrasing の 正確なニューアンス を醸し出すため、注意深く 考慮されている。

Byron の < Beppo 初稿 >の修正が

- (1) いかに丹念に 殆ど誤りなきまでに 音声と意味の適切なバランスとハーモニーで幾多の試行的努力を経て 定着したか
- (2) いかに しばしば Byron の最もたのしい詩行が <最初の詩想の泉>の上に 達成されたものではなかったか

を示している。

たとえば

< Our cloudy climate— and our chilly women >

(Stanza 49) の詩行は、より快音の響きに欠けた

< Our smoky chimnies >で 初稿は 始っていた のが 改められている。

また＜ Soft as her clime, and sunny as her skies ＞

——この風土のごと^{やさ}しく 空のごと^{あつたか} しい

(stanza 45) と イタリアの貴婦人の目を唄った、見事に バランス
のとれた詩行は 初稿では

＜ like her own Clime— all Sun and fruit— and skies ＞

として、より スムーズでない詩行で始まっている。

Byron は ≪ Beppo ≫ の中で Pope の 二行連句を放棄した一方、詩行の
^{釣合}balance に加えて この巨匠、師 pope の 多くの工夫を採用している。

最も しばしば 用いたものの一つ、そして その使用上 微妙に バイロ
ンのものは＜格調の高く あるいは センチメンタルに 華麗なるもの＞
を

＜ くだらぬ あるいは 平凡にして 馬鹿げたこと ＞ と共に

風刺的に並列していること である。

そして Byron は その効果を高めるために^{おどけ}道化たライムを みずから 工
夫して つけ加えている。

我々は 更に ≪ Don Juan ≫ の中に Pope のテクニックの修正を見る
ことが できるであろう。

参 考 文 献

- 1) Elizabeth Longford, Byron: Hutchison.
- 2) Ernest Hartley Coleridge. The Poetical Works of Lord Byron: Lewis
Prints.
- 3) Leslie A. MArchand, Byron's Poetry: John Murray.
- 4) Bernard Blackstone, Byron: Longman.
- 5) John D. Jump, Byron: Routledge & Kegan Paul.
- 6) Lafcadic Hearn, The English Romantic Poets: 北星堂。